

# 審査結果報告書

2023 年 1 月 31 日

主 査 氏 名 天野 英樹



副 査 氏 名 山下 拓



副 査 氏 名 武田 啓



副 査 氏 名 佐藤 文子



1. 申請者氏名 : DM19015 志村壮一郎

2. 論文テーマ :

Serum epiplakin might be a potential serodiagnostic biomarker for bladder cancer

(膀胱癌における血清エピプラキンの診断マーカーとしての可能性)

3. 論文審査結果 :

膀胱癌において膀胱鏡検査と尿細胞診は膀胱癌の診断と再発の管理に重要な検査である。膀胱鏡検査は苦痛を伴い、尿細胞診は侵襲が低い、感度が十分でない問題点がある。そのため、有用な腫瘍マーカーの開発が期待されているが、確立されていないのが現状である。申請者は創傷治癒や皮膚の機械的強化に関与するタンパク質のエピプラキンに着目し、膀胱癌患者 60 例、結石患者 20 例、健常人 20 例を対象に、血清エピプラキン濃度及び免疫組織化学を用いて膀胱癌患者の組織標本でのエピプラキンの発現を検討し、それらが臨床病理学的及び患者予後と関連があるか否かを評価し、下記に記した 1-5 について明らかにした。

1. 膀胱癌患者の血清エピプラキン濃度は健常人、及び結石患者と比較しでは有意に増加を認めた。
2. 血清エピプラキン濃度と臨床病期、病理 Grade、尿細胞診と関連は認められなかった。
3. 臨床病期と血清エピプラキン濃度は単変量、多変量解析において有意な再発因子ではなかった。
4. エピプラキンに対する免疫組織化学でエピプラキンは腫瘍細胞膜と細胞質で発現を認めた。
5. 腫瘍組織でのエピプラキンの発現量と無再発生存期間、癌特異的生存率、全生存率について単変量解析及び多変量解析を施行したが有意な所見を認めなかった。

以上の結果より免疫組織化学的研究により、血清のエピプラキン値と臨床病理学的所見との間で相関性を認めることが出来なかった。しかしながら血清エピプラキン濃度は健常人や結石患者と比較し有意に発現の増強を認めたことから、血清エピプラキン値が膀胱癌の診断に有用なバイオマーカーとなる可能性があることが示唆された。本研究は臨床上の観点から価値が高く、それをまとめた本論文も大変優れており学位論文として相応しいものである。更に、審査の場においても適切な研究の呈示と回答が得られたため、審査員全員の合意の上で申請者の学位審査は合格と判断した。